



ピタインダオン

(おさみがりにばし)

第 48 号

発行日 2024 年 9 月 20 日

発行人 矢代 しゐ

秋田県御野郷 7-1-29-305

琵琶吟

文月のとある午後

羽織り袴の若い男性奏者が

緋毛氈の中央に座し

深々と一礼した

松を配した屏風を背に

しゃもじ形の琵琶を抱え

果敢に戦った白虎隊を宙で朗吟する

鋭い撥さばきに心の弦が高鳴る

掻き鳴らす音色は哀しいが

高い金属的な響き

キリリとした声と共に鳴る

会津魂が乗り移った

白虎の奏者は無念の刀で

さらに激しく斬り込んだ

ハーバー

薄靄がかかったハーバーは
遠くまで見渡せないが
都会の匂いに満ちている

小雨が降ると

辺りは鉛白色に染まり

潮風のしょっぱい汽笛が

ハーバーからとどけられる

雨のなか

ハトは楽しげに

生いのちのしずくをついばんでいる

雨は

一頻り降って止んだ

空もハーバーも

林立するビルも

仮面を脱いだように

素顔を現し

華やぎを取り戻した

中空に架かっている

虹の橋は

未来へとつづいているようだ

その時

二隻の大型客船が入港

運んできたのは

異邦人の

明るいざわめき

色鮮やかな装い

香りたつ甘い香気

出港の汽笛も聞こえて

ハーバーに
屈託のない
光の匂いがあふれる



めんこさん

一カ月に一度ある

読み聞かせの会

ドアを開けると

純真でかわいい

めんこさんが待っていてくれる

また会えた喜びに

思わず顔がほころぶ

さあ、始めるよ！

読み進めると

ことばは

シャボン玉のように

ふうわり ふわふわ

めんこさんの心に舞いおりる

モゴモゴ グルグル コケコツコウ

バタバタ クルクル デデポッポウ

あ、瞳が輝いた！

キラキラ ピカピカ モーモーモー

ピンピカ トテチテ ホーホーホー

床を足踏み

トントン トトントントン

小指でリズム

ポンポン ポポポンポイ

まーるい音が

輪になって踊る

心の目で見たものを

心の耳で聞いたものを
素直に表現する

めんこさん

一カ月に一度

わたしは

めんこさんに会いにゆく

①

【病院の待合室での一コマ】

夫 大丈夫だが？

妻 うん、大丈夫だ

混んでるな

夫 診察室に一人で大丈夫だが？

妻 うん、大丈夫だ

夫 ちゃんと先生にしゃべれるが？

妻 うん、大丈夫だ

「身体の痒いどこさ塗る薬

なんとなが出してもらえねべきや」

って言えばいいんだべ？

夫 んだ

妻 あど、「痛どこさ貼る湿布薬も」

って言えばいいんだべ？

夫 んだ んだ

妻 大丈夫だ

夫 先生さ言えるが？

妻 うん、大丈夫だ

夫 こただに混んで疲れねが？

妻 患者さん、みんな待つてるな

夫 大丈夫だが？

妻 うん、大丈夫だ

夫の問いかけに

オウム返し of 妻

予約と言えども

待つことが当たり前の病院

思いやりの言葉は

混み混みの空気を和らげる

ようやく

名前を呼ばれて

診察室に

真っ先に入る

夫

妻に寄りそう

夫は

心配性の愛妻家

②

いつ来ても

チヨコレートに囲まれているね

わたしまで

太っちゃうわ！

あら知らなかったの？

小学生が

学校帰りに唄いながら通るのよ

♪太りゃんせ 太りゃんせ

ここはこの太道じゃ

御野場通りの太道じゃ

③

夢の中で

詩を書いた

タイトルは「Pay君」

小鬼たちが唄う

♪オタスケ オタスケ オタスケヨ

オネガイダカラ タスケテヨ

脅されているのか

気持ちを塞ぐ言葉が並ぶ

そのとき

突然

わたしが言う

Pay Payで!

あの世でも

支払いができるのか?

ついに詩が完成した

起きて

早くメモしようと

ペンを持つ

が

覚えていない

詩の中身

夢は幻……

【現代詩の勉強会】

●会の次第

去る九月十四日（土）、あきた文学資料館において、第十五回「ピッタの会」を開催した。

講師は木村哲夫氏。演題は「詩にふれて 詩らしきものを」。

参加者は十二名。内、詩人協会外の参加者は四名であった。

＊

講演は声高でない、控えめな話し方で進められた。終始変わらない優しさで、お人柄が自然に表れた講演会となった。

木村氏の詩は、おそろく穏やかな環境で育まれるから、読者の心に届く詩が生まれるのではないか。

参加者と充実した時間を共有でき、嬉しかった。

① 開会挨拶

② 講師紹介

③ 講演

④ 自己紹介

⑤ 質疑応答

⑥ 次回案内

⑦ 閉会

●アンケートより

* 今日の日の楽しみにしていました。

「詩」とは何か？ いまだにわからないでいるからです。

人前で話すことが苦手で、共感しました。心の中のもやもやを吐き出すように、「詩」に出来たら。

詩心、現代詩手帖の一部を聞いて、詩とは何か？ と、私なりにわかったような気がしました。とても良かったです。

* 朴訥な語り口の中から、繊細でやさしい感性を感じました。木村さんの詩心のとらえ方を学ばせていただき、参考として取り入れてみたいと思いました。

毎回、違った観点から勉強させていただき、ありがとうございます。

* たいへん勉強になりました。

きむてつさんの詩の歩み方、ことばの歩み方が、魅力的です。

時間を沈殿させて、澄ませてゆくひと。

* 心にしみ入る語り口で、詩の魅力を浮かび上がらせてくれました。

〈あと、いろいろ言いましたけど〉
とても良い時間がとれました。

* ピッタの会に出席する度に、少しずつ詩の真髓がわかってくるような気がします。

私はただ何十年も日記を書き続けていますが、それを短くして、本当の詩作となるように勉強します。よろしくお願い致します。

講師の先生の講話をよく聞いて、今後勉強をして行きたいと思います。

＊ 木村哲夫さんの人間性にふれられてよかったです。

私も人前で話すのが苦手なのですが、木村さんの話す勇氣にとっても救われた気がします。必ずしも、うまく話そうと考えず、すなおにゆっくり通じられたら良いのですネ。とても勉強になりました！

＊ 途中で気づきましたが戻れなくて、補聴器なしでやってきましたが、やはりきこえませんでした。

しかし今回の資料は話す部分も書かれていて、大変助かりました。これがないと半分も理解出来なかったかもしれません。

＊ 参加させて頂くたびに、勉強させて頂いております。

感謝です。ありがとうございます。



【あとがき】

九月も中旬を迎えた。例年だと、お盆がくると朝晩涼しくなり、キリリとした秋の気配を肌で感じていた。

だが、今年は違う。お盆が過ぎても暑さは一向に衰える気配はなく、ひたぶる猛暑に外出を避け、クーラーに頼る生活だった。

〈地球沸騰化〉という言葉も耳にした。異常な暑さが常態化すると、心身ともに箍が緩んだように締めまりがなくなり、げんなりとなった。

*

季節の境目が曖昧になると、おそろく五感や自然の機微にも疎くなりはいないだろうか。

春一番、和風、薫風、野分、木枯らしなど、風一つとっても、その言葉がもつ心象や意味合いが

違ってくるのかも知れない。

*

虫が鳴いている。心を澄まして、虫のおしゃべりに耳を傾ける。

ホットコーヒーを片手に、夕風にのってきた秋を迎え入れる。

心の窓を開放し、四季折々の草花を愛でる余裕と、詩的情緒を保つ時間を大切にしたい。

*

【母の句】

・かたくなになりし齢やねじり花

・腰おろす石のぬくもり遠花火

